<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>階級に就いて 五・完</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>高田 保馬</td>
</tr>
<tr>
<td>発行</td>
<td>経済論叢</td>
</tr>
<tr>
<td>収録番号</td>
<td>16(5): 753-769</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>1923-05-01</td>
</tr>
<tr>
<td>DOI</td>
<td><a href="https://doi.org/10.14989/128028">https://doi.org/10.14989/128028</a></td>
</tr>
<tr>
<td>タイプ</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>公開</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>出版者</td>
<td>Kyoto University</td>
</tr>
</tbody>
</table>

京都大学
私は既に述べたように、吸収の法則を説明したのは、私の立場として、社会的勢力の累積を論じるためである。特に、代議士および、学問を含む職業・会社の株主である私が、政治的勢力の発展を指摘する際、その法則の適用を示唆している。

同様に、この法則は、その社会的勢力の累積の間、如何にして定められるか、それらの分布された問題がある。然れども、私の社会的勢力に

私は、一の論拠から始まる。仮に各罪法を法として正当なるものなら、と云ふ是非の論を考えて見ようと思う。
第十六巻 第三巻（示）

彼の行った犯罪、単に事情の事実としての犯罪は当然課刑されるが、他の客観的要素による犯罪はその程度を念頭に加わらなければならぬ。他方には、社会的勢力が有する所は、対等な資格による勢力の分割をもって支配する所の支配を受ける。彼の強さは、他の客観的要素に基づくものに立たず、何等の効果もあろうか。
臣としての勢力によって定められる。面で他の義理に於て有する勢力は云は、中に吸収され終らは、従って彼の強さの判断は何等の交渉を有すべき此法則は職業的分配と非職業的分配との交渉を有する所に最も明白なる表現を有つ。例へ是人一貴族であって中流階級の人々の職業を認めたら、所の医師、弁護士、技師等の業に従事する人、一方職業の故に一定の収入、職業的信用等を有する。然れども、彼の強さの意味に於ける彼の社会的勢力は決定して此箇面前に於て有する。同様に彼が政府家として優越なる権力の支持者なりとせよ、此時恐らくは彼の社会的勢力は此職業の故に分享せる、権力によって定まり、貴族の地位的特権は凡て彼後に隠れて有する。従ひて種々の源泉から彼に流れる社会的勢力の集積する所、常に彼に作用する同様なる勢力が割合幾つのか資格から彼の上に顕れて、集積が何等彼の勢力の向上を意味せずと思はれる。

論理的秩序に於て立つ

第十六卷

三言

十三言
図表
（図1）
（図2）
就って見る。AやBやCもその力の数値に現れて増加を計る。然に此勢力は成長の服従
よりして成立すとすれば、ある一定の数値を越えればそれ以上増加せず、従って彼等の勢力は成長さすれども、確
かに他力の既に支持する同種の勢力が各勢力に加速度に増加せむとすれば、又他方より見れば、五
加するにしても、最初の際の勢力を越えればそれ以上増加せざるものである。此増加の差より、止む
障壁は之を一方より見れば、此の如く個人の服従の限度に存せざるも、又他方より見れば、五
加の支持者の甲の勢力は各勢力までに加速度に増加せむとすれば、又他方より見れば、五
加するにしても、最初の際の勢力を越えればそれ以上増加せざるものである。此増加の差より、止む
無数を異にする雲云も、之云ふに於て、AやBやCもその力の数値に現れて増加を計る。然に此勢力は成長の服従
よりして成立すとすれば、ある一定の数値を越えればそれ以上増加せず、従って彼等の勢力は成長さすれども、確
かに他力の既に支持する同種の勢力が各勢力に加速度に増加せむとすれば、又他方より見ければ、五
加するにしても、最初の際の勢力を越えればそれ以上増加せざるものである。此増加の差より、止む
時、甲Aの分量又は程度はどこまで増加し又側の何によって確定させるかと云ふに、一方に於ては、更に一般に、甲Aとその他
（甲Aと甲B、甲C等の均衡によるのみならず、他方、於ては更に一般に、甲A等、その他の
乙C等の均衡される如き強さの関係を傾け、従って増加の程度を減ずる。甲Aは共集積の進行に於て此均衡
衝突に接觸するほど稀な際を減じ、従って増加の程度を減ずる。甲Aは共集積の進行に於て此均衡
力との均衡的關係を主眼として考えれば、此場合、エラムの法則と相似なる遞減の法則が作用
する。即ち、元来の力、云はと勢力資本の増減ある限界に達するまでに増加は比例的にも絶
対的にも行ばれるけれども、此際の超輸の他は絶対的にみの行ばれ、更に進めては最終其増加は行
はずか、他の勢力に於する均衡の點に達する。これは此均衡力の普通的均衡の場合にあって、勢力のみは自ら他の勢力と異なる長い立
方である。即ち、勢力の普通的均衡の中に興から数寄してこれば勢力が間接的に勢
方である。
今まで、社会的勢力の諸種類を分析し、その相互の関係を考察し来った。私は皆の問題に関して
一切の浩論をなし、以て此 Erla に長引き考察の仕事の端を見たわけならば、
彼等の勢力の分配を加へ、ある社会的勢力の諸種類を収め、その分配の方法を加へたい。

此等の社会的勢力の分配を示る方法は、着眼點の如何によりて種々に分配させる、事を得
く、故にには極真空ものとして機転の非機能的分配・職業的非職業的分配を挙げた。
今此一種の方法別々基礎として第二のものを理解する事が出来、それは結社的非結社的（仮り
以マクサイパ・コルピ・ラスキ等の用語によれば、association に属する所の、従ひて association の
の分化である。一の結社即ち有組織社会の意志よりて行はる所の分配、即ち勢力分布の方向
論叡、階級に或る（奉）

第十六巻
第六話
三七九
第七九
数年が有組織社会の意志によって決定される、所の分配は、然ざる分配との区別である。人或は疑問を起こすであろう。有組織社会の意志による分配と云ふ事は理解に苦しむ。如何にしてそれが行われるかを。答は至って簡易である。これが有組織社会の意志によらざる分配と云ふ事は理解に苦しむ。如何にしてそれが行われるか大切な。答は至って簡易である。
分享させる、勢力は同時にまた対等に均等であろう。勢力である事もある。政府の行政官、
技術官、労務組合の職業的分配が国家・組合より夫々の分配を意味させる事もあたかも得る。
面して非職業的分配と非職業的分配との区別を示す。而して、全職業的分配の関係を見ると、
様々な分配の関係を仮に説明を加える事から知も得られる。面して非職業的分配と非職業的分配との区別、
その関係の関係に本的に直ちに設け、その結合の分配と職業的分配の関係を見ると、
此等によって分配させ、勢力の範囲は次に図示する如きものとなる。
私は前線の図表を通じて、一の結社の有組織社会の意志によって分配される社会的勢力の範囲があらゆる社会的勢力の全くなる部分を占めるか否かを知る事が出来、換言すれば結局分配の意志に於ける重要さを判定する事が出来、如何なる有組織社会の意志をも交渉なく、云は前者意志によって分配される社会的勢力の所なくして、行はる分配の範囲がある。然らざる分配の範囲に於いて見ても、特定の一の有組織分配、非職業的分配の何れをも含み、又機能的分配非機能的分配の何れぞも含むに拘らず、此の如くたより区分たる事に疑は無い。而して此事は有組織社会の大小盛衰を判断に於て左右せると、譲のものに非ず、例へは結社の如き、階級的の複雑、範囲の宏さ、機能の廣汎、機能の強さを伴ふに拘らず、初歩にして客観的要素とするより、職業的分配と思するか、結社の意識を第一に於て社会的勢力の一の有組織の主要であるから、社会的勢力の分配を分析的考察して見たい。如何なる分配が結社によって行われ、如何なる分配が国家によって行われるか、
第一、権力の分配は、国家によって行われる、それは機能的分配である。非機能的分配というものは、実質的あるいは形態的のものになる。実質的のものは、一方、形態的のものになる。実質的のものは、機能的のものになる。機能的のものは、国家によって行われる。非機能的分配は、実質的のものになる。実質的のものは、機能的のものになる。機能的のものは、国家によって行われる。非機能的分配は、実質的のものになる。実質的のものは、機能的のものになる。機能的のものは、国家によって行われる。非機能的分配は、実質的のものになる。実質的のものは、機能的のものになる。機能的のものは、国家によって行われる。非機能的分配は、実質的のものになる。実質的のものは、機能的のものになる。機能的のものは、国家によって行われる。非機能的分配は、実質的のものになる。実質的のものは、機能的のものになる。機能的のものは、国家によって行われる。非機能的分配は、実質的のものになる。実質的のものは、機能的のものになる。機能的のものは、国家によって行われる。非機能的分配は、実質的のものになる。実質的のものは、機能的のものになる。機能的のものは、国家によって行われる。非機能的分配は、実質的のものになる。実質的のものは、機能的のものになる。機能的のものは、国家によって行われる。非機能的分配は、実質的のものになる。実質的のものは、機能的のものになる。機能的のものは、国家によって行われる。非機能的分配は、実質的のものになる。実質的のものです。
論破  
国権について再考

第十六卷  
第十二章  三

 (...)
夫一婦の制度は、特に明治維新の後、国家中で一般的に採用され、社会の生活に大きな影響を与えた。この制度は、財産に係わる権利を家族に譲渡するものであり、家族内での権利配置を体制化していた。

しかし、この制度は、家族内部での権利の明確化を図るために制定されたものであり、個々の家庭においては、権利の複雑さが問題となっている。したがって、この制度は、社会全体の観点から見ると、その目的を達成するものであるといえる。

なお、この制度は、特に明治維新期に制定されたものであり、その後の日本社会の変化に伴い、その運用が変化している。}

このように、夫一婦の制度は、国家中で一般的に採用され、社会の生活に大きな影響を与えた。この制度は、財産に係わる権利を家族に譲渡するものであり、家族内での権利配置を体制化していた。

しかし、この制度は、家族内部での権利の明確化を図るために制定されたものであり、個々の家庭においては、権利の複雑さが問題となっている。したがって、この制度は、社会全体の観点から見ると、その目的を達成するものであるといえる。

なお、この制度は、特に明治維新期に制定されたものであり、その後の日本社会の変化に伴い、その運用が変化している。
一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ

一剣帽を以て踏すさざるものを非ず。油絵の如く異彩なる演算を積み重ねて読書上げられ
論衆
階級に立って ранее

私が国家に於いて対抗的地位を占め、動すば亦之を壓迫せむとすることを知る時代に於て特に然り。

私は社会的勢力の種類及びその種々なる分配方法を観察することに依て、明に階級に於ける
国家外的要素の存在と重要さを確認した。階級概念の内容が如何なるものなるにせよ、それ故
社会的勢力の差異を以て中心の事柄とさせる事を争ひ難い。然るに此勢力の懸隔の決定、即ち階級
階級の決定に於て、国家は僅に其一部分の役目を演ずるのみ、此部分が如何に重要なるものに
せよ、此共は如何に相を同様なる役目を異

国家の変動によりて変動する所のものに非ず、云は國家外的要素が存在する。従は國家的範疇では無い。階級的懸隔のの中には国家によりて
階級は全體社會的範疇である。國家勢力分配の一分子たるに止まる故に、全體社會の存在する所
会ありと見る外は無い。而して階級は國家組織の一節としてのみ認めべきものである。一言にして盡せば、
をもなさず。故全體社會の構造の一分枝としてのみ認めべきものである。
此小篇、當初論述せたる問題にして論及せざるものならば少からず。一切の世道の勢力を
以て「世道に対する全服従」を云ふ一原力の種々なる表現に外ならし、見るに所謂定量の法則
を認もる事、ネッセンハイマグ若者若衆等の為に告ずるが故に、これの諸項に関しては後日を以て新
に考察を試みようと思う。今迄該消き来られる所、私之なる限りに於て云へば、世道学界の處女地、
何人も手を下さる未拓の原野である。私の殆ど全集の参考書をも用ひ得ざりしに如上の考察は恐
らく粗大の誤謬を含むであろう。若し此誤謬が何人かによりて真を発見せらるべき機縁を
なす事を得ば、私の幸之に若くものの無い。（完結）